

【垣根やフェンスに結わえてある黒いリボンの前を横切る時には一礼すること】

それは床辻にある禁忌の中で、一番人の生活に密着しているものかもしれない。祖父母から親へ、親から子供へ伝わる禁忌が多いのに対し、この禁忌は子供から子供へ伝わる。小学校に通い始めてすぐ、上の学年の子から通学路に行く作法として習うわけだ。俺も、一学年上の子供から「こういうリボンを見かけたら、前を通る時は頭を下げるんだよ。じゃないと近所で葬式が出るんだ」と言われたのを覚えている。

「近所で葬式が出るって、絶妙にありそうで嫌なところをつくよな……」

「蒼汰くん？ 突然立ち止まってどうしたの？」

コンビニの買い物袋を下げた一妃が不思議そうな顔をする。時間は深夜二十三時過ぎ。たまたまルーズリーフが切れたのに気づいて買い出しに来ただけで、見つけたら補導されそう。だから花乃は留守番。

俺は、隣のフェンスに結わえられたリボンを指さす。

「ほらこれ。こういうの見かけたら一礼して前を通れって禁忌があるんだよ」

「へー、初めて聞いた」

「え、まじ？ 意外。一妃って床辻の禁忌を全部網羅してるかと思ってた」

「全然してないよ。ぽこっと新しいものが生まれてきた

李するし。そもそも人の間で勝手に言い出されただけで、怪異関係ないのとかもあるし」

「あ、やっぱそうなのか」

全部が全部本物なのか、とは疑っていたけど、やっぱ中身の無い禁忌もあるらしい。と言っても、どれが本当でどれが嘘か分からないから全部避けるしかないんだけど。

でも、この黒リボンって俺が小学生の頃から言われているし、同じ学区の子供はみんなやってるから、もっと古いものだと思ってた。

と思ったのが顔に出たのか、一妃がリボンを指さす。「だって、いつも通る道とかならともかく、初めて来た道で夜とかだったら気づかなくない？ それを守るの無理じゃない？」

「……………言われてみれば」

「だから、これって人間が勝手に作ったものじゃないの？ 面白いから私たちも新しく結んでみる？ みんながお辞儀して前を通っていくの、想像するとちょっと面白そうだよな」

「やめよう。っていうか、そういう理由で結ばれたやつありそうで嫌だ」

「——ずいぶんと勝手な言い草だね」

「うおっ」

背後からかけられた声に俺は飛び退く。

いつの間にかすぐ後ろに、小学生くらい女の子が立っていた。と言っても、少年探偵のような格好の彼女は小学生じゃない。床辻を守る四人の地柱——守り神のうち一人だ。

「夏宮さん、なんでここに……」

「妾がどこをどう歩こうと勝手だ。おぬしたちがそれを増やそうがの」

「いや、すみません……出来心で」

「己の立場を弁えろ」

ぐうの音も出ない。一妃はほった膨らませてるけど、頼むから大人しくしてくれ。

夏宮さんは反省を見てとってくれたのか溜息をつく。

「その黒紐はもともと、妾の境界を示すものだったのだ」
「え」

「妾が地柱を継いだ時は子供過ぎて未熟だったから。自分が床辻のどこまでを守ればいいのか分からなかった。それで、妾のあねさまが街に杭を打ってそこに黒紐を結わえてくれたのだ。ここからここまでは妾が守るべき領域だと分かるようにな」

「ああー」

確かにそう言われると分かりやすいかも。俺もどの辺までが自分の領域かってよく分かんないもん。

夏宮さんは、子供の顔に大人びた苦笑を見せる。

「元は才の足らない妾のためのものだ。だが皆は、それが妾の守りの証だと思い、行き過ぎる時には頭を下げるようになった。杭が腐って新たな建物になっても黒紐を継いでいったのだ。今はただの子供のおまじないだかの」
夏宮さんはふふ、と笑って歩き始める。

その小さな背中に、彼女が未熟だった頃の面影はない。きっと彼女の家族ももう、この街にはいない。

俺はそんなことを思っ……改めて隣にいる一妃の手を引いた。